

八、善知識

子どもはおとなの醜い部分を知らない。自分の善良さで、おとなのだれをでも見る。

だからずんずんのびてゆくのである。子どもの世界は桃色である。

皮肉な眼で他人のあらばかり探している者は、必ず老人である。でなければ成長することを失った世にすねた人である。

あまりにもあさましいものを持ち過ぎた人が、それを自分に気づかないで、他人の上になんかを見るのだ。

ナスの枯れかけた残骸が畑の中にある。

成長することを失ったものは、何でも醜くなる。ハツラツたる生命の躍っている者は、無名草といえども美しい。

キリストは「嬰兒のごとくなれ」と言ったそうだし、『華嚴經』においては、釈尊は、善財童子となつて、五十三人の善知識に教えを乞うて、素直に歩みきっている。私はそれらの世界がわかる気がする。

世にも悲しいことは、醜いおとなの心で、純な子どもの心を傷つけることだ。醜い夫婦喧嘩は、子どもの心にあてる焼鏝である。

1

善知識は親である。

人の子が、醜い老人？から傷を受けた時、帰ってゆくことのできる親である。どんな時にも。「よしよし、わかつている。心配しなくてもいい。お前の心はわしがよく知っている。」

親は、世のどんな荒波にも動かず、傷つかず、どんな冷たさにも温和さを失わず、いつも同じような、なごやかなものだけを与えてくださる。

善知識は揺るがぬ人である。

そして私をどんな時にも子心にしてくださる。

人の子は、いつも変らぬ温かさを求める。

戦いつかれた時、裏切られた時、さびしい時、悲しい時、いつも変らぬ動かぬ胸を求める。

その時、親として立つのが善知識である。善知識だけが、私の運命を護りつづけて育ててくださる。

親鸞聖人は、聖徳太子を父のごとく母のごとしと慕われた。そして太子の上に救世観世音を拝まれた。ただにこの世一世の慈愛を感じられただけでなく、「久遠劫よ

りこの世まで、あはれみ」たもう大悲を感じられた。二聖の間は六百年も隔っているのに。

聖人が太子を親として拝まれた、太子奉讃の和讃は涙なくしては誦せられない。

善知識の上には仏が拝まれる。

善知識を憶う日に、私はどんなことでも、じつと黙して堪え忍ぶことができる。善知識を憶う時、私は善知識の美しさ尊さが拝まれ、私が他人の醜さを探しのぞこうとすることが恥ずかしくなる。